

この本の使い方

前書『「証」の診方・治し方 ― 実例によるトレーニングと解説 ―』およびその続篇となる本書は、呈示された患者情報から自分で証を導いて処方・配穴を考え、その後解説を読むという流れで弁証論治のトレーニングを行うことをおもな目的としている。

また、症例は実際の臨床例であり、初診から治癒までの経過が記されているため、弁証論治のトレーニング用としてだけでなく、症例集としての活用もできる。

序章では、弁証論治のなかの特に「論治」の部分について、高橋楊子先生（湯液治療）と呉澤森先生（鍼灸治療）によるポイントが述べられている。弁証論治を行ううえでの基本となるものが示されているため、症例を解く前にぜひ一読してほしい。

第1章から第6章は、部位別の症例とその解説である。便宜上、症例は章を分けて通し番号をつけているが、どこから読み進めてもよい。

症例はそれぞれ最初の頁に弁証に必要な情報が示されている。次頁からは鍼灸および湯液の弁証論治解説部分になっているため、まずは頁をめくらずに自分で症例を分析し、弁証を立てることをおすすめしたい。続く解説部分では鍼灸・湯液2つの面からの治療法・考え方の解説がある。特に弁証については鍼灸・湯液の枠にとらわれず両方の解説を参考にできる。また、弁証過程において陥りやすい間違いなどが示されており、多くのヒントが詰まっている。

それぞれの症例は以下のような構成になっている。

◆**症例呈示**——年齢・性別・主訴・既往歴・現病歴・現症・四診の結果など、証を導くために必要な患者情報の呈示。

◆**治療へのアプローチ**——呉先生（鍼灸）と高橋先生（湯液）による解説。まず症例を呈示した先生による解説があり、引き続き補完する形でもう一方の先生による解説がある。

弁証：弁証，治法，具体的な処方あるいは選穴・手技，解説など。

治療経過：実際の治療の経過説明。

症例分析：症例を分析する際の考え方や，チャート式の病因病機図，最後には「弁証のポイント」がある。

アドバイス：弁証する際に陥りやすい間違いの鑑別点や，実践的で臨床に役立つアドバイスなど。

*本書は、『中医臨床』の連載コーナー「弁証論治トレーニング」の一部を単行本化したものである。誌上では出題・読者回答・解説の形であったが、単行本化にあたって読者回答は割愛した。